

コラム66：英国雑話 （2018年9月）

今から50年前、広島市内の公立高校でのことです。

世界史の授業の合間の余談の時間に、教師が生徒に向かって問いました。

「キミたち、英国紳士というと、どんな俳優を思い浮かべますかね」

即座に、前の方に座っていた生徒が声を上げました。

「ショーン・コネリー！」

すると、すぐ側の席の女生徒が、いきなり声高に反論したのです。

「ショーン・コネリーなんて紳士じゃないわよ！」

教師は対立する二人を、なだめるごとく苦笑して、

「そうよ。ちょっと違うかもしれないのう」

そして、続けて生徒たちに問いましたね。

「キミたちは、ローレンス・オリビエという俳優を知りませんか？」

「？？？」

……生徒の方から声が上がりませんでした。

今思うに当時の高校生には、少々ハードルの高い質問ではなかったですかね。

彼はシェイクスピア劇の世界では高名な俳優であっても、映画雑誌の人気投票で上位に来たり、娯楽作品に出演するような人ではないですからね。ちなみに私が保管している50年前の映画資料(SCREEN 1968・5月号)を見ると、読者の人気投票で男優1位はS・マックイーン、女優1位はO・ヘプバーンで、S・コネリーは10位です。彼は2年前には1位になっていますから、英国の俳優さんとして、まず彼の名前が出てきたのは当然でしょう。「007シリーズ」の映画が大ヒットしていましたからね。そして、当時の人気投票ではR・オリビエは30位以内にも名前はありませんから、高校生が知らないのはごく当たり前のことなのです。



今の私が、「英国人らしい俳優」を挙げるとすれば、ピーター・オートゥールですね。

知らない人もいるかもしれませんが、当時の人気投票でも12位に入っていますし、決して無名の役者などではありません。

世界的に大ヒットした「アラビアのロレンス」(’62)で主役のロレンスを演じた人と言え、かなりの人にはわかってもらえると思います。

風貌はアングロサクソン系の白人で金髪碧眼、長身で細身のスラリとした体型で、知的で繊細な雰囲気。いかにも誇り高く、礼儀正しく、温厚な「英国紳士」という印象です。

さてさて、例によって前置きが長くなりました。そろそろ大英博物館について書かなくてははいけません。ここはロンドンに来たら、絶対に行かなくてはならない場所ですからね。なにしろ人類の遺産が800万点も展示されている世界最大の博物館ということですからスゴイです。正面入り口から入ると、何列にもなって行列が沢山出ています。先生に引率された小学生位の子供たちの姿が多いようです。

ここの入館料は1759年の開館以来、ずっと無料。だからといって、いつでも誰でも自由に入れるというのではなく、厳しい保安検査というのはあります。それゆえ、長い行列ができるのです。爆弾や銃を持ち込まれたら大変ですから、仕方のないことです。



なにしろ、世界の1/4を支配していた大英帝国の武力と財力で、世界から集めてきた人類の遺産ですから、その数が膨大です。一週間かけても廻りきれないと言われる博物館ですから、相当に絞って見ても一日はかかります。私がこの博物館にいたのは、現地ガイド案内での1時間と、自由見学の1時間の計2時間のみです。これで大英博物館を語る資格はありません。それゆえ今回のコラムのタイトルを、予定していた「大英博物館にて」を、「英国雑話」に変更したのです。映画で言えば、予告編のみを見て、本編を見ていないのと同じですからね。



長蛇の列となっている保安検査を終えて、正面入り口からグレートコートと呼ばれるガラス屋根の吹き抜けの大ホールに入ると、まずは左側の展示エリアを見る事になります。ロゼッタストーンやモアイ像などの古代のコレクションが並んでいます。現地ガイドさんの説明付で、この中を見ましたが、私が一番インパクトを感じたのは「ライオン狩り」と名づけられた大きな壁画。石の壁に掘られたレリーフ(浮彫)です。王のスポーツとして当時行われていたようですが、矢で射ぬかれたライオンの描写がスゴイです。頭を射抜かれ、飛びあがったライオンを、腹部側から描いており、断末魔の咆哮が聞こえるような大胆な構図―古代アッシリア帝国にも「北斎」が居たか、と思いましたよ。



この壁画はBC625年にアッシリアで造られたとされていますね。アッシリア帝国というのは、地中海から、コーカサス、アラビア半島とエジプトまで支配していたとされており、この壁画は今のイラクで発見されています。当時地球上で最も強力な国であったとされていますが、文化的にも優れており、この時代に世界最初の図書館まであったといわれています。それにしても、この壁画、計算してみると、今から2643年前の話ですからね。その当時の日本はというと、縄文時代の末期の竪穴住居と狩猟生活の時代。国家も成立しておらず、文字もなく、稲作も始まっていない地の果ての、野蛮人であったわけですからね。この文明的な「落差」には、今さらながら、驚かされますよ。

現地ガイドさんに付いて2階の古代エジプトのコーナーに行くと、そこには豪華な棺とマスクに覆われた王様のミイラが横たわっています。ガイド氏の説明に寄れば、昔の王様は、自分が入る金箔のマスクや木棺以外に石の彫像や埋葬する品々を、生前から準備していたようです。なぜかという、当時の寿命が35歳と極めて短いことと、死後に「不死の存在」に移行するためには、十分な準備と儀式が必要であると考えていたからのようですね。面白いのは、死んだ後に心臓と胃と腸は取り出して特殊な壺に保管されますが、脳は廃棄されたようです。どうも古代人は、脳には魂は宿っていないと考えていたらしいですね。

王様のミイラと並んで、当時の兵士のミイラもありました。こちらは棺もマスクもなく、黒く変色した裸の姿でガラスケースに入っています。二十歳くらいの若い兵士で体に損傷が見られることから、戦いで亡くなっただけと言われている。彼が倒れた場所がミイラ化に適した場所であったため、腐敗することなく、タマタマこのような姿になったというわけです。権力と富にものを言わせた王様のミイラと、戦場で亡くなった無名の一兵士のミイラが、数千年後の現在、大英博物館の同じ部屋に安置されているというのは面白いことです。「人間の死」が平等であることの証のようなものです。彼らの死体を見つめる子供たちは、何を感じていたのでしょうかね。



それにしても、「永遠の命」を欲しがるとするのは、為政者の傲慢としか思えないですね。一人一人の「人生」というのは、きわめて不公平であっても、「人の死」というのはきわめて平等です。誰でも必ず受け入れなくてははいけませんからね。古代エジプトの時代から、現代のコンピュータとAIの時代に至るまで、それは変わりません。しかし、どんなに科学が発達しようと、「不老不死」の「特効薬」などつくってはいけないと思いますね。そこでは王様と兵士が、同じ「一個の人生」とはならないわけですから。「王様」だけが、「永遠の命」を獲得して生き続ける一なんてことになったら、「人の生」が根底からオカシクになってしまうと思うんですよ。逆に言えば、「永遠に死ねない」というのは、スゴイ苦しみになると思うんですがね……。

ところで、ここで素朴な疑問が湧いてきます。エジプトのロゼッタストーンやミイラ、現在のイラクに在ったはずの「ライオン狩り」の壁画、それがどうして英国にあるんでしょうね。どうも多くの展示品は、大英帝国の威光をかさに、相当荒っぽい方法で運び出したようですし、パルテノン神殿の上に鎮座していた彫像などは、今だにギリシャ政府と所有権をめぐるモメているようです。「万人が知識を持てば、社会が明るくなる」という啓蒙思想ゆえに、無料にしているというより、他国の遺跡を勝手に持ち帰ったという、「後ろめたい過去の歴史ゆえに、お金を取れないんじゃないの」という気がしますね。英国の本音をあえて言葉にすると、こんな感じになるのではないですか。「これは人類の共有財産だから、我が大英帝国 がしっかりと管理して守っていきますよ。あなたの国では文化が失われる危険がありますからね。だから我が国は、これで儲けなどしないのです」

ちょっとしたハプニングがありました。グレートコートと呼ばれる広場の一角でガイドブックを販売しており、いろんな国の言語があつたのですよ。B-5判位のサイズで値段は6ポンド(900円位)で手頃な価格ですから、日本語版を買おうとして、ふと横を見ると「大英博物館」と書かれた、A-4判の大きさのガイドブックがあり、値段は同じ6ポンドです。私は当然のごとくそちらの大きい方を買いましたね。集合場所に行くと、同じツアーの人が、私の買ってきたガイドブックを見て、「それ買っちゃあダメですよ！中国語版ですよ」—あわててめくってみると、その通りでしたね。「大英博物館」というのは「漢字」ではなく「中国語」だったのです。すぐに売店に戻って、日本語版と換えてもらいましたよ。

ところで、どうして中国版だけ同じ値段でA-4判のガイドブックがあつたんでしょうか。それが英語でも仏語でもスペイン語でもなく、中国語のみしかないので。まずこの博物館にくる人が、中国人が多く、中国版がよく売れるということは確かでしょう。そして博物館のみならず、英国の観光地に行っても、中国の観光客が多く、それも20代から40代くらいの若い人たちが圧倒的に多いと感

じましたね。以前に、日本に来る中国人客の「爆買」(ばくがい)が話題になりましたが、彼らの今の関心は、欧州に向かっているように思えます。

「一帯一路」(いったいいちろ)—この言葉を思い浮かべましたね。中国が4年前から掲げている国家的戦略です。中国から、中央アジアを経由して、アフリカからヨーロッパまでを結ぼうという、途方もなく遠大な現代版「シルクロード経済圏構想」というわけです。中国が世界の中心であり、他に優越しているという「中華思想」を具体的に体現したものと言えます。「中国はまだ貧しい人たちが多くですから、生活に余裕のある人は1割位かもしれません。それでも日本全体と同じくらいの人口になるんですよ」—以前中国に行った時に、現地ガイドの青年が言った言葉です。13億の人口というのは、それくらいスゴイ数字なんですね。「歴史問題」や「領土問題」等のことを含めて、「付き合いにくい隣人」であっても、決して無視できぬ大きな存在であることは確かです。

今回の旅ではロンドンの郊外、西北に位置するオックスフォードに行き、40余のカレッジの綜合体である素晴らしく美しい街の散策を楽しみました。「ハリーポッター」の映画のロケに使った建物を見る事もできました。実はその場所で、今回の旅で一番の「アクシデント」があったのですよ。フリータイムということでカミサンとその宿舎の前を歩いていた時のこと。建物の美しさに魅かれたのか、カミサンが「ワタシも写真を撮るね」と言って鞆から予備のカメラを取り出し、私にカメラを向け、構えたまま後ろに下がった時です。「！！！」—いきなりカミサンが魔法のごとく、私の視界から消えたのですよ。



何が起こったのか！一瞬わかりませんでしたね。
あわてて駆け寄ると、崖下でカミサンが仰向けになっているではないですか！
そこは上の道路と50cmくらいの段差になっていたのです。後ろ向きに落下したんですね。
「オイ！大丈夫か！」「イターイ！」—ウメイテいます。仰向けのまま立ち上がれません。
幸い意識もアリ、脚も腕も動くようです。ほどなく立ち上がったカミサンの右ひじを見ると、その部分がズルリと皮が剥け、赤く血が滲んでいます。
「腕が曲がる？」「なんとか動くみたいよ」—骨折も脱臼もなく、なんとか打撲で済んだようです。
「この程度でヨカッタ！ヨカッタ！」

まわりに知った人がいるわけもないので、とにかく集合場所に行きました。そこで、同じツアーの人たちがいろいろと助けてくれました。とりあえず傷口を水洗いし、どなたかが持参していた軟膏を塗り、ガーゼを当てて、日焼け止め用の長い手袋を履いて、なんとか応急処置ができました。ホンマに有難かったですね。

旅行中の傷害保険に入っていたので、添乗員さんに証明書を書いてもらいましたが、帰国して使用する事態にはなりません。こういうのを「不幸中の幸い」というのでしょうか。かなりの段差から仰向けに落ちているのですから、頭部を打っていたり、首を痛めていたら大変なことになっていました。骨折や脱臼をしてもおかしくない状況です。現地入院なんてことになったら、旅行を続けることはできませんからね。思わず冗談を言ってしまいましたよ。
「エカッタのう。これぐらいの怪我で済んだのは、ハリーポッターの魔法のおかげかのう」

—それにしても、こういう事故が起こると、団体ツアーというのも悪いことばかりではないですね。



私達が今回参加したのはH旅行社の「憧れのイギリス6日間」という企画。ツアーの参加者は総勢32名と、かなりの大人数。ベテランの女性添乗員さんが付いてくれていましたが、かなり大変であったと思いますね。そのうち男性は5名で、これは私達と同じく夫婦単位での参加です。参加者の主流は、「元気なオバサン」同士の友達参加。平均年齢は60歳半ばといところですかね。なかには70台後半で一人参加の女性がいましたが、その年で、英国を旅する「体力」と「好奇心」があることがすばらしいですね。

団体ツアーというのも、ガイドさんの黄色い旗にゾロゾロと付いて行けばいいだけではありません。観光地に着くと、ガイドさんの案内の後、「フリータイム」というのがあって、「1時間後に、今の場所に集合してください」という指示があります。当然ながら時間厳守ですが、これがなかなかツライのですよ。せっかく来たのだから、出来るだけ見たいし、時間は限られているし、ということで私達はギリギリの時間になって滑り込み、ということもありましたね。ところが、ツアーの主流である「元気なオバサンたち」は、いつもキチンと時間を守りますし、朝の集合時間も決して遅れたりしないのです。これは大したモンだと思いましたね。

私は以前にも書いているように、「旅行ぎらい」ですし、特に海外旅行はイヤです。実を言いますと、そういうこととは別に、今回は健康面での不安があったのですよ。「頻尿の悩み」—要するに、「トイレが近くなったな」という感じなんですね。今年の冬あたりからですが、「年のせい」かなと思いましたね。しかし、旅行に行くとなると、それではすまないのです。海外では日本国内のようにどこでもトイレがあるという状況ではないですからね。旅行前になって、私は思い切ってカミサンに「悩み」を打ち明けました。

「最近トイレが近くなってなあ。どうしたモンじゃろう」

「心配せんでも、団体ツアーなんだから、行けばなんとかなるよね」

「そうは言うても、渋滞のバスの中で、ガマンが出来んようになったらどうするんなら？」

「そがい心配じゃったら、尿もれパットでもしたらー」

「尿モレパット？？？」

—というわけで、カミサンの買ってきたソレを使ってみましたよ。

パンツの「その部分」にガーゼ状のモノを張りつけるだけなのですが、以外に邪魔になりません。普通にトイレに行く時にも、特に支障はないようです。

「コリャアええな！」

「これで安心して、イギリスに行けるよね」

4日間の英国の旅の間、快晴の気候に恵まれ、交通渋滞もなく、きわめて順調に日程を消化。

幸いにも、「尿漏れパット」が役に立つことはありませんでした。しかし、「備えあれば、愁いなし」といいます。これから海外に行く際には必需品となることは確かです。それにしても、こんなことを心配すること事体が、「年を取ったなあ」と感じますね。学生の頃に、いろいろとハードなバイトをしましたが、その頃はトイレのことなど気にならなかったですよ。

建築現場や展示会場の設営、世論調査や交通量調査 etc.....今だとトイレの心配をするような



仕事ばかりでした。しかし、当時はそんなことは考えもしなかったですねえ。
その頃はとにかく若く、元気で健康だったということでしょう。

今回の旅で一番気に入っている写真がコレ。
オックスフォードの街を散策している時に、なにげなく撮った写真です。古い建物に挟まれた通りの真ん中に何やらカラフルな売店があり、その向こうは青い空が広がって—というだけの風景を撮ったつもりでした。
ところが帰国してからパソコン画面で見ると、若い女性が写っているのですよ。それもスバラしくキレイな脚の金髪の＜美少女＞です。全く意図した被写体ではなかったゆえ、まるで「心霊写真」のように感じましたね。



この店で売っている物がよくわからないのですが、商品の上に書いてある **squishies** という言葉を電子辞書で調べると、「ぐしゃぐしゃの」とか「ふわふわの」という意味があるようですが、何であるかはわかりません。ネット検索してみると、動物型をした子供向きのゴム製おもちゃのようで、「低反発・ストレス解消・香り付き」などと書いて、アマゾンでも販売していますね。そして、この女性は一体何者なのか？もちろん「心霊」などではなく、現実の女性ですが、観光客には見えません。この地に住んでいる人ではないかと思い、画面を拡大してみると、腰にポシェットのような小物入れを身に着けており、それが開いているのです。彼女は商品の向こう側にいる誰かと、にこやかに話しているように見えます。ということは、彼女はこの店の売り子である可能性が高いようです。顔はよく見えませんが、彼女の推定年齢は＜少女＞というより少し上で、二十歳前後。おそらくオックスフォードに学ぶ学生のアルバイトではないか……などと勝手な想像をしてみたのですがね。

旅をする前の、私自身の英国人のイメージというのは、あまり良いものではありませんでした。イヤに姿勢がよくて、背筋をピシッと伸ばして歩く、という感じで、プライドが高い「冷たい欧米人」というイメージしかなかったのですよ。もちろん全くの私の偏見でしかないのですがね。旅をすると、その国の印象が変わります。国家としての外からの印象と、そこに住んでいる人と接した時の印象が違うというのは、当然のことかもしれません。そして、その国を旅行した後では、大抵はイメージが良くなることが多いのです。そして今回の「英国の旅」で、英国と米国は母体は同じ「兄弟」であつても、国の方向も、国民の価値観も全く違う、ということを私もカミサンもなんとなく理解しました。今回の「英国の旅」は、帰国後しばらくしてから、カミサンがつぶやいた一言で締めくくりたいと思います。

「イギリスの人って、昔の家や古い家具をスゴイ大事にして、

ホンマに地味に堅実に、暮らしとるんじゃねえ」